

2025 年度 エヌ・シイ・ティ放送番組審議会 議事録

1. 開催日時：2025 年 12 月 5 日（金）11:00～12:00
2. 開催会場：エヌ・シイ・ティ本社 3F 大会議室
3. 出席委員：6 名（委員総数 6 名、欠席なし）

出席委員		放送事業者	
委員長	長谷川 和明	今泉 道雄	代表取締役社長
委員	川上 恵子	金子 克之	取締役地域情報部長
委員	木村 聰子	東條 真一	地域情報部課長
委員	堀 美穂	田辺 誠	地域情報部課長
委員	村山 等 <small>（田辺貴雄代理）</small>	渡辺 早貴	地域情報部チーフリーダー
委員	吉田 玲子		

敬称略、五十音順

4. 開会挨拶（今泉社長）

NCT のサービスエリアは中越・県央地域で拡大しており、開局順で長岡市・三条市・見附市・小千谷市・燕市・柏崎市・加茂市・田上町・魚沼市・南魚沼市・出雲崎町・十日町市・湯沢町、今年度は津南町まで拡大した。中越・県央では弥彦村と刈羽村の 2 自治体を除く 14 市町村で開局となった。エリアの世帯数を見るとサービス提供可能世帯数は約 24 万 9 千世帯となり、鳥取県の世帯数約 21 万 9 千世帯よりも大きな規模となった。なお、ご利用世帯数は約 7 万 8 千世帯となったところである。

制作関連では、目玉コンテンツとして長岡花火の中継があるが、今年は全国約 2,700 万世帯の方に配信させていただいた。この数は日本の全世帯の約半分。テレビのみならずインターネット・YouTube での配信も実施し、2 日間で約 94 万の視聴をいただいた。Instagram 投稿では三尺玉のショート動画が、1,400 万回視聴となり、海外を含め大変大きな反響をいただいた。

花火以外では、夏の高校野球新潟県大会を 1 回戦から中越・県央地域の学校を中心に中継していて今年は 47 試合を生中継させていただいた。アルビ BB はホーム全試合と、プレーオフ 8 試合を中継し、多くのみなさんに見ていただいた。また、中学生の野球大会「オンヨネカップ」など地元のスポーツの試合を多く放送させていただいた。

選挙関連では、十日町市長・燕市長選を始め、各市議選も開票速報の生中継を実施するなど、地域の皆さんに必要な情報を発信してきた。

これからは今まで以上に、地域のみなさんが本当に必要な情報を発信し、地域になくてはならない存在となつていただきたい。NCT の取り組みにつきまして忌憚のない意見をいただき、議論いただきたい。活発なご審議をお願い致したい。

5. 委員長挨拶（長谷川委員長）

順調にエリアを拡大していく、地域になくてはならないメディアとして活躍いただいている。

テレビは「オールドメディア」と言われ流行語としてノミネートされるくらいに言葉が浸透してきた。いわゆる「テレビ・新聞・ラジオ」から若者が離れているという。今後は生中継など「ライブ性」が大事ではないかと感じる。

民放の視聴率を確認すると、スポーツ・ニュースなど生の番組が視聴率をとっている。ドラマはあとで見て楽しめるため視聴率が伸びていない。NCT が取り組んでいる方向性は良いと思う。地域を細かく掘り下げる番組など、今後どのような番組を作ったら良いか、委員のみなさまからは一視聴者としてご意見いただき、良い番組作りに貢献していただきたい。

6. 報告事項（東條課長）

今年度の主な取組について報告。

7. 審議

（1）番組名：「花火 + （プラス）特別編～ともにあげよう！フェニックスプロジェクト～」

概要：中越地震発生から 20 年、フェニックス花火の初打ち上げから振り返り、長岡市立豊田小学校と石川県七尾市小丸山小学校の児童が被災地で花火を打ち上げる活動を追う。

（第 51 回日本ケーブルテレビ大賞番組アワードドキュメンタリー部門応募作品）

＜審議委員からの主なコメント＞

- ・ドキュメンタリー風、映像が綺麗で丁寧に作り上げられた素晴らしい番組であった。放送番組としてだけでなく、教材としても使えるような番組だと感じた。後半、子どもたちに焦点を当てていて良かった。しかし、少し情報量が多かったように思う。花火財団、花火師、子どもたちと話がたくさん出てきたので、番組を分けて作ってもよかつたのでは。
- ・花火は夏のものという概念があるが冬の花火というところで引き付けられた。長岡花火の起源である長岡空襲から丁寧に説明されていて、市外の方が見ても分かりやすい内容である。災害の情報もきちんと数字があり、記録的な作品としても貴重。令和 4 年の番組審議会でも「花火 + 」が協議に上がったが、その際に「人にフォーカスしてほしい」「スポンサーの声も入れてほしい」という意見があったが、今回の特番では色んな方の視点が取り上げられていて、募金のシーンでは花火に託す人の思いが感じられて良かった。復興や災害がテーマだったが、三条市でも過去に「7.13 水害」を経験し、20 年以上が経過している。今後経験していない世代に向けてどのように伝えるか、若い世代への意識づけのきっかけになると感じ、勉強になった。
- ・見ごたえのある番組だった。各報道機関が注目してこの話題を報道していたが、ここまで掘り下げて取り上げているところはなかった。長岡花火を外に向けて発信していく意義を子どもたちも理解して活動している様子に涙が出そうになった。財団や花火師以外の、周りの大人たちの思いもくみ取っていただけると、より深い番組になったのではないかと思う。
- ・長岡市民として 20 年前の最初のフェニックス花火の映像を見て、この頃は 6 か所からの打ち上げだったのかとこれまでの規模の変化に驚いた。この時の打ち上げを見て涙した記憶がよみがえった。中越地震を知らない子どもたちが能登で花火を上げたいという過程が丁寧に描かれていた。小丸山小学校も受け身の状態から、交流を通じて“一緒に”花火を上げるんだという気持ちの変化が丁寧に描かれていた。子どもたちの成長物語は大人にとって元気になる、涙が出る良い番組だった。2024 年のフェニックス花火で「希空」の楽曲を利用する意味が分かっていなかったが、番組を通じて理解ができた。
- ・他県出身で中越地震を経験していない。長岡に住んで 10 年になるが、ここまで過去や歴史を学ぶ機会がなかったため、豊田小学校の児童と同じ視点で見入ってしまった。映像の素材が豊富で NCT ならではと感じた。2024 年に現地で長岡花火を見たが、もう一度見たいと思ったときに映像が流れたため、泣かせに来ているなど感じた。親目線で、子どもたちがテレビに取り上げられて放映されるというのは教育の一環としても興味深かった。県を超えて能登の小学校の場面を取材している部分も印象的だった。

＜事務局補足＞

- ・番組は YouTube でも配信している。

・「7.13 水害」から 20 年の記録と振り返りについて、昨年三条市から依頼を受け番組を制作し納品した。

(2) 番組名：「つばめ桜まつり 分水おいらん道中」

概要：第 80 回の節目を迎えた「分水おいらん道中」。県内外の応募者から選ばれた 3 人のおいらん役が決定の瞬間から本番当日までの様子を追う。

＜審議委員からの主なコメント＞

・おいらん役の 3 人にスポットを当てて追った番組で、見やすかった。自分ごとのように興味を持って最後まで見ることができた。裏にある人間模様を見させていただき、「この 3 人を見に行こう」と感じられるような番組。当日までに興味を持って実際にまつりを見に行った方もいたのではないか。作り方や放送の仕方が良かった。引き続き地元の若者にスポットをあてた番組を制作いただきたい。地元の学校や若い人たちが頑張っているものを取り上げていただきたい。

・選考から本番まで舞台裏が見られて興味深かった。かつら職人がおいらん役のかつらを一から作っているとは思わなかった。

・「まつり」と聞くと本番の様子を想像するが、裏側や人にフォーカスしていて良いと思った。番組を見て、まつり行つてみたいと思える番組。番組を見た視聴者が「行ってみたい」と思う“行動変容”に繋がることは大切だと思う。桜も咲いているタイミングで撮影していて素晴らしい。

・近いけど行ったことのないまつりだったが、歴史などもコンパクトに分かりやすく紹介いただいて、内容が伝わった。まつりに対する興味が湧いた。3 人のおいらん役の練習風景、努力する姿が見られてケーブルテレビらしい視点でよかった。欲を言えば、3 人がおいらん役を務めたことで、自分の心に変化があったのか、その後どうなったのかなど、おいらんをやった方の感想や、まちの人の声がもっと聞きたかった。

・この番組でおいらん道中を始めて知った。おいらん役を応援したくなる構成だった。現地で見てみたくなった。着物やかつらがかなり重く大変だと思うので、番組で映っている以上においらん役の方の本音を引き出せると良かった。練習と本番の違いや、「大変だった」の言葉の、さらにその先が聞きたかった。

＜事務局補足＞

・日本ケーブルテレビ連盟「おまつりにっぽん」に応募して採用いただき、制作に至った番組。
・まつりの最中に体調不良になったおいらん役もいて、感想のインタビューが 1 名しか叶わなかった。

8. 閉会挨拶（金子部長）

委員のみなさんからいただいたコメントが支えになる。頑張ってきた甲斐があったと、スタッフにも伝えたい。これまで 6 年間、営業部でエリア拡大を進めてきたが、7 月から地域情報部を担当している。コンテンツを届ける側となり、身の引き締まる思い。おかげさまで対象エリアが増えると、リリースや取材依頼が増えてくる。地域密着だから「できること」と「やらなければいけないこと」を見極めて、進むべき道、やるべきことを吟味しながら進みたい。番組を制作するだけでなく、どうやったら見ていただけるか SNS 等でも発信し、認知いただけるようにしている。「NCT っていいよね、がんばっているよね」と信頼していただけるところまで持っていくたい。

次年度のキャッチフレーズは「まち・ひと・こえ」。今回の審議会で「人にフォーカスしてほしい」「まちの声を取り上げてほしい」とご意見いただき、やることは間違っていないと感じた。この方向で進めてまいりたい。引き続きよろしくお願い致したい。

以上